



2017年10月2日

ケインズについて思うこと

公益財団法人 国際通貨研究所
専務理事 倉内宗夫

ケインズ理論は、第二次世界大戦後の経済復旧とその後の発展を支え、とりわけ米国を中心高い評価を受けた。しかし 1970 年代以降になると批判が幾度となく押し寄せ、もうケインズ経済学は死亡したと揶揄されることもあった。そもそもケインズ理論は「不況の経済学」であり、完全雇用・資本がフル稼働でない限りその有効性が失われるものではないであろうし、彼が提供した、金融・経済を理解するうえで必要な視点と分析方法の功績は今なお色あせるものではない。改めてケインズ経済学を再認識するべく、この夏はケインズに関する著作物を漁ってみた。私なりの人間ケインズ評を記したい。

学者としての地位を不動のものにした主著『雇用・利子および貨幣の一般理論』の序文でケインズは「私が最初に説得にとりかからなければならないのはわが経済学者諸氏である。」と書いている。まさに彼の理論への自信と挑発的な性格が表されている。

ケインズを紹介した数ある書籍の中ではハロッド(ケインズの弟子で著名な経済学者)が書いた『ケインズ伝』が圧倒的な情報量を誇る。ケインズの幼少期から亡くなるまでの一生について、実に事細かく記述がなされており、伝記とともに、難解なケインズ経済学の解説本でもある。緻密ではあるが冗長とした文章を何度も読み返すと、弟子ハロッドのケインズに対する尊敬の念がひしひしと伝わってくる。まさに日記のような細かさでケインズの生涯が綴られているが、それには息子の成長を克明に日記に残し、記録に残るものはほとんどアルバムに整理していたというケインズの両親の几帳面さに負うところ大である。

ケインズはどんな性格の人物であったろうか。研究者の記したものを列挙すると、①いかなる人もゆるさない峻烈な言葉、②時々で大きく揺れる感情、③人を見下す叡智主義で多くの人に反感を持たれた、④昨日彼が主張したのと同じことを今日主張する人を罵倒した変節漢等々相当厳しい。攻撃の矛先は恩師マーシャルに対しても向けられたようだ。

高弟ハロッドは 24 年間の接触を通じた印象をケインズ伝の中で「私はケインズが全く並はずれて終始一貫的であったと信じている。と同時に並はずれた性質が普通の人たちの心に混乱的な印象を与え、不安な気持ちを植え付けたと信じる」と記している。やはりかなり難しい人であったことは間違いないようだ。

ケインズは既定路線のようにイートン校からケンブリッジ大学に入学し数学を専攻

したが、政治から芸術に至る幅広い経験を積み充実した学生生活をおくった。しかしトライポス（卒業試験）での不満足な成績と、文官試験では次席に甘んじ、希望した大蔵省ではなくインド省で官僚を始めたことは、彼の人生の最初の躓き・試練といえよう。

インド省はわずか2年で退官しているが、そこでの体験を踏まえて出版した処女作『インドの通貨と金融』では金本位制の課題を抉り出し、最良の国際通貨システムとして金為替本位制を提唱している。終生彼の関心事の中心には通貨・貨幣問題があり、その契機となったのは退屈なインド省勤務というのも面白い。そこで培われた国際通貨体制の理念は30年後のブレトンウッズ体制構築時の議論につながっている。

感性鋭い彼は時評（パンフレット）という手段で直面する政治／経済／社会の諸課題に鋭いメスで切り込んだ。例えば旧平価による金本位制を復活させた時の大蔵大臣チャーチルを徹底的に批判した『チャーチルの経済的帰結』（1925）や100年後を見越した『孫の世代の経済可能性』（1930）など読者を飽きさせないテーマと興味ある内容の評論を多数発表した。

公人としての最後の仕事は第二次大戦中に始まったブレトンウッズ体制構築での米国との交渉であった。そして世銀／IMF創設会議に参加した直後の1946年4月に心臓発作でケインズは62歳の人生を終えた。

ケインズに関する膨大な情報に接して、私の脳裏をよぎったのは次の2点である。

一点目：はたしてケインズは幸せな一生を送ったのだろうか。

私生活の面では、ロシア人バレリーナと結婚し、また文化・芸術への思い入れ等々で充実した生涯であったに違いない。しかし学者・公人としては、挫折と苦悩を余儀なくされたのではないか。パリ講和会議では懲罰的な対ドイツ賠償案に失望し英国代表を辞任した。第一次大戦後に平価での金本位制復帰に断固反対したが、時の大蔵大臣チャーチルに押し切られた。最大の苦悩／挫折はブレトンウッズ体制での米国との論争に敗れたことではなかったか。インド省勤務時代から温めてきた国際通貨体制の理念を実現する上で最高の舞台ではあったが、いくつかのアイディア（例えば規律付けの仕組み／コンディショナリティ）は採用されたものの、彼の提案は米国から拒否された。結局米国主導の世銀／IMF体制下で米ドルが基軸通貨となり、国際金融界での英国の存在は大きく後退した。もともと当時の両国の経済力を比較すれば勝負は明らかで、そのことはケインズ本人が一番解っていたはずだ。なにせ英国は戦費調達に支障をきたすほど国家財政は困窮していたし、当のケインズが米国からの借款を交渉する弱い立場にあったわけだから。

二点目：ケインズが生きていたらブレトンウッズ体制の顛末についてどのような時評を書いたのだろうか。

自らが提案した国際清算同盟案と国際共通通貨「バンコール」の優位性をシニカルに説いたかもしれないが、この点は皆さんのご賢察に委ねたい。

（IIMA メールマガジンへの寄稿）

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2017 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>